

子どもの貧困と学校の役割

—西成高校のミッション—

山田勝治（大阪府立西成高等学校）

はじめに

1974年大阪府立西成高等学校は「地元西成区に普通科高校を」との4万人署名により、「地元校」として設立された。もとより西成では、寄せ場・釜ヶ崎、被差別部落、在日コリアン、沖縄から移住者、そして野宿など差別と貧困の集積と累積が見られた。

創立から30年を経た2006年本校は「格差の連鎖を断つ」というミッションを掲げた。その年はまさに、バブル崩壊後に生まれた子どもたちが高校に入学を果たした年であった。格差社会という言葉やワーキングプアという言葉以上に学校現場では親から子へ格差と貧困が連鎖する現実があった。子どもたちが将来、市民として社会参加し政治参加していくためにも、「将来のために、今、頑張れる生徒」を育成する必要があるとの「育てたい生徒像」を掲げた。

1. 今、高校であられる貧困とは

大阪府における授業料減免率は2005年26.2%であった。全国でも最も高い減免率であったが、府内の課題集中校では概ね50%を超えていた。2006年度からは制度が変わり、生活保護世帯が減免対象から外れた。生活保護世帯に生業扶助として各世帯に授業料がいったん渡される形になった。今年、小・中学校では「子ども手当」支給と給食費未払いの問題が取りざたされているが、これは昨年までの高等学校における生活保護世帯における授業料未納問題と同根である。さらに、2010年度からは授業料が無償化された。授業料の減免時代は経済的困窮家庭のほとんどを減免申請の時に把握することができた。無償化で授業料未納という生徒にとっても学校にとっても困った問題はなくなるが、かえって貧困状況が潜在化するようになった。

さて、現在高校進学率は全国平均97%時代に突入した。私たちはこのことの意味をしっかり捉えないといけないと思う。進学率97%とは、小・中学校で起こっているすべてのことが、高校でも起こるということを示してい

る。大阪府の高校では生徒たちが入学者選抜時に「学力」（偏差値）によって「輪切り」されて振り分けられる。そして現在のところ「学力格差」は「家庭環境格差」でもある。その結果、家庭と学習に課題を抱えた生徒がいくつかの高校に集中することになる。こうした、構造は中途退学者数の分布をみても明らかである。2008年の府内（全日制）の中退者は約2700人（2.5%）であり、課題集中校に集中している。堺市の道中氏が明らかにしたように、こうした中退が格差を連鎖させていくことは間違いない。また、貧困は虐待の形を取って現れてくることも多い。幼少期から中学校時代までに虐待を受けた子どもたちは、そのすべてが解決されて、高校に入学してくるわけではない。高校においても虐待は形を変えつつ続いているとみるべきである。

「門限を守れず、親からの厳しい折檻を受けるため、友人宅を泊まり歩く」「ある日、自宅に戻ったら家族が引っ越ししていた」「昼食がなく、水をばかり飲んでいる」、私たちが気づくのはそういう生徒の様子である。

2. 「自分とはちがう人間になってしまいたい」（30.4%）

西成高校では、毎年5月に新入生にアンケート調査をしている。「学校生活と人権に関するアンケート」である。生徒の実態からスタートするのが本校のスタイルである。今年度は学校生活だけでなく、家庭についても質問をしてみた。

Q「あなたと現在いっしょに生活している人は誰ですか」。集計の結果、過半数の生徒の回答が「ひとり親等」である。また、Q「周囲のおとなは自分に大きな期待をかけている」との問いには、7.9%が「そう思う」と答えている。大阪府立学校人権教育研究会が同じ質問で集計をしているが、府の平均の約半分の割合である。

課題集中校で担任をした経験から、家庭訪問時に生徒の机を見た記憶があまりなかったことから、今年度、生徒の机についても調べた。

Q「あなたは家/生活の場で勉強するときに、自分の学習機がありますか？」過半数が自分だけの学習機を持っていないことが分かった。教員として抱いていた実感に近い集計結果であった。また、Q「あなたは家/生活の場で、落ち着いて勉強できる環境があると思いますか」との問いに「落ち着いて勉強できる環境がある」と答えた生徒は半数以下であった。親や周囲の大人から期待されず、学習機も与えられず、過半数の生徒が「ひとり親」の元で生育してきている。確かに「自尊感情」育成が重要であることに疑いはないが、目の前の問題(生活)に改善の方向性が見えない中、どのようにしたら自尊感情が育つのだろうか？

また、学力は「習慣」である。生徒たちは幼い時から学習習慣を身につける家庭環境になかったのではないだろうか。そうであるなら学校こそが家庭にかわる学習環境を提供しなければならない。

3. 家庭環境へのアプローチ

- (1) 教職員は生徒の話を徹底して聞き、シグナルを受け止める役割をはたす。そして、「信頼できる」大人として接する。
- (2) 生徒自身が自らの生活をどう捉えているのか？どうしたら「意識化」できるか。そのプロセスを用意する。
- (3) 受けとめたシグナルを学校として共有し、問題事象に対処できる校内体制(学校全体)が必要。
- (4) 問題事象への対処の過程で適切な時期に必要な関係(福祉)機関と連携する。
- (5) 問題の「急性期」だけでなくその後も継続的に事象に関わっていく。

生徒には指導だけでなく支援が必要である。特にここ数年はこうした点に意識的にこだわって教育活動をしている。

既存の社会に適応する「社会性」とともに、現状の課題に気づき、それを克服しようとする意欲をもち、自分の今の状況は変えることができることとらえることができる「社会力」の育成についても学校の役割だと考える。

4. 「反貧困学習」が持つ教育の可能性

従来、貧困は各家庭の自己責任とされてきた。果たしてそうなのか？従来の人権教育も差別との文脈のなかで結果としての貧困を取り上げてきた。どのような原因により貧困に陥ったかの前に、子どもたちにとっては理屈

でなく、毎日の生きにくさ、貧困そのものがスタート地点なのである。

西成高校では2007年から総合的な学習の時間(校内名称Challenge)1年生時に「反貧困学習」を展開してきた。教材は教員の手作りである。

(1)生きる力をもつ子どもたち(ダッカのストリートチルドレン)、(2)「ネットカフェ難民」からセーフティネットを考える、(3)「ワーキングプア」からセーフティネットを考える、(4)シングルマザーについて、(5)「ホームレス中学生」について考えよう、(6)貧困ビジネスについて、(7)日雇派遣について、(8)「こんなときはどうするの？」(労働者を守る法律や制度)、(9)西成差別から野宿問題へ、(10)社会的排除について考えよう、などの問題を教材に取り上げている。「反貧困学習」は一方的に知識を教え込むものではない。生徒との学びあいの中で、彼等の発する声(感想という形)を拾い上げ共有することで。①自らの生活を「意識化」する②現代的な貧困を生み出している社会構造に気づく③西成学習を通して差別と貧困との関係に気づく④現在ある社会保障制度について理解を深めることなどを通じて貧困を生み出さない「新たな社会像」を描き、その社会を創造するための市民(主体)を形成することを目指している。

5. 格差に挑む学校づくり

「格差の連鎖を断つ」とのミッションを掲げてから、5年目を迎えている。今後3年間にめざすのは、①最大の教育環境である教員を意識的に育成することであり(教育の質の確保)、②意識的に「意欲」「関心」「態度」に重点を置き、意欲を伸ばす教材や評価の開発である(育てたい学力)。③更にキャリア教育のみならず職業教育的カリキュラムの開発を通じて、④「関係の貧困」に対抗するチカラを育成することである。

このようなビジョンを見据えながら、当面、中途退学防止が最重点の課題である。そのために、生徒の就学を支援する組織の立ち上げを計画している。現在は、SSWの配置がなされない高等学校であるので、自前のケース会議を設定し、地域や行政機関との連携協力を模索している。

参考文献

大阪府立西成高等学校、2009『反貧困学習—格差の連鎖を断つために—』解放出版社